県模試

二〇二二年度　神奈川県高校入試模擬試験

国語

一月号

〈五十分〉

注意事項

1 教室コード番号・受験者コード番号・氏名は、解答用紙の決められた欄にはっきりと記入しなさい。（コード番号は算用数字で、下の〈**記入例**〉のとおりに記入すること。）

2 解答用紙の「ＱＲシール貼り付け欄」に自分のＱＲシールを貼りなさい。

3 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

4 問題は**問五**まであり、**1**ページから**14**ページに印刷されています。

5 解答用紙の決められた欄に解答しなさい。

6 数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れなさい。

7 マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の〇の中を塗りつぶしなさい。

8 解答用紙にマス目（例：□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

9 終了の合図があったら、すぐに解答をやめ、指示にしたがって解答用紙だけを提出しなさい。

〈記入例〉 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

問一　次の問いに答えなさい。

(ア)　次のa～dの各文中の――線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　賛同者が漸次増加している。（1　ざんじ　2　さんじ　3　ぜんじ　4　ちくじ）

b　資格を喪失する。（1　もしつ　2　そうしつ　3　ちゅうしつ　4　ゆうしつ）

c　重機で岩を粉砕する。（1　ふんさい　2　ふんさく　3　こさい　4　こさく）

d　飲料水を携えて歩く。（1　かま　2　かか　3　たずさ　4　たくわ）

(イ)　次のa～dの各文中の――線をつけたカタカナを漢字で表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　警察はヨウギ者の行方を追っている。

1　かっぱは日本のヨウカイだ。　2　金属の板をヨウセツする。

3　母は人に対してカンヨウな人間だ。　4　料理人をヨウセイする学校に入る。

b　手帳と筆記用具をジョウジ持ち歩いている。

1　実験の器具をセンジョウする。　2　災害に備えて飲料水をジョウビする。

3　鍋の中からジョウキが立ち上る。　4　ジョウギを使って直線を引く。

c　彼の言葉がやる気にハクシャをかけた。

1　演奏にハクシュを送る。　2　この絵画にはハクリョクを感じる。

3　祖父のドクハクに耳を傾ける。　4　海辺のホテルにシュクハクする。

d　海外旅行のお土産をイタダく。

1　夢の実現のためにチョチクを始める。　2　大会のチョウテンを目指す。

3　卒業証書をジュヨされる。　4　国連にショウニンされる。

(ウ)　次の短歌を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

紅椿（べにつばき）いちりん落ちてその枝にいちりんほどの空咲（くうひら）きたり　　小島（こじま）　ゆかり

1　椿の花が落ちたことに冬の終わりを予感し、まもなく春が到来することを期待する気持ちを、「空咲きたり」という比喩表現を用いて象徴的に表現している。

2　花が落ちたあとの空間を埋めるかのように成長する生命力あふれる椿の様子を、「いちりんほど」という言葉を用いることで読者に想像させている。

3　美しい花が落ちてしまったあとの空虚で寂しい風景を、「いちりん」「くう」という言葉の響きを生かすことで印象深く描いている。

4　鮮やかな花が落ちてさらに鮮やかな空が現れる様子を、同じ言葉の繰り返しと「咲く」という言葉を効果的に用いて描き出している。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高校一年生の「小林勇」は、剣道部に所属している。都大会が近づく中、出場選手は三年生のみだと聞いた一年生の多くは朝稽古に参加せず、三年生も「木次」以外は参加していなかった。しかし、放課後に行われる勝ち抜き戦の結果次第で一、二年生にも大会出場のチャンスが与えられるという話を信じて、「勇」は勝ち抜き戦に参加した。

午後の勝ち抜き戦で、勇は二十三名中四位に残った。それを決めたときの試合では、三人の二年生と二人の三年生を続けて破った。三年生の二人に一本も取らせないで勝ったときなどは、鳴島(注)がとんできて、このやろう、よくもやりやがったとあきれ顔でいって笑った。勇は次に控えていた木次と対戦して敗れた。疲れを吹きとばし、切っ先に神経を置いて精一杯戦ったが及ばなかった。木次の気迫が勇に勝っていた。

布施(注)と戦ったとき、鍔迫合い(注)になった。勇は先日行なわれた石渡の試合を見て以来、いままで何気なくやっていた鍔迫合いに、注意を注ぐようになっていた。金村(注)を相手に何度となく、鍔迫合いから面を抜く練習をした。布施を相手に、勇はそれを試した。

布施の竹刀を寝かせた瞬間、跳びすさって面を打った。きれいに入った。ポコーンと音が体育館に響いた。やった。勇は部長の旗を見た。上(注)ってはいなかった。まさか、と思ったとき、布施のメンが勇をとらえていた。

二本目は正攻法で出た。二度飛び込んでかわされたが、三度目はじっくりと布施の呼吸を計り、彼が眼を一回り大きくさせて突っ込もうとする隙をとらえて踏み込んだ。布施の竹刀は虚空を打ち、勇は長い竹を真っぷたつに割ったような爽快感を抱きながら、布施の傍をすり抜けた。いいメンだ、と背後で鳴島がいった。三本目は出合いがしらに、布施得意の出ゴテを決められた。それでも勇は胸の内で、布施さんに勝った、と思っていた。それを裏付けるように、席に戻ると金村が、おまえの勝ちだといった。最後の一人に残ったのは、予想通り木次だった。部長は試合が終ると、目礼をして引き上げていった。

鳴島が出てきて、稽古終了の掛け声をかける前に、簡単に日曜日の集合場所をいい、三年生四人と二年生の布施が都大会に出場するので、部員はしっかり応援するようにとつけ加えた。それから、礼をした。

礼をしたあとも、勇は脳を抜かれたようになって坐っていた。体育館の入口の向こうにある、四角い世界に納まっている古い校舎をぼんやりと眺めていた。みんながひき上げてしまうと、1こんな馬鹿な、と思った。軀が熱くなった。こんなのは剣道じゃない、ままごとだと叫んだ。頭の血が逆流しているかのように、勇をせきたてていた。勇は確かに、何ものかにいそいでいる自分を感じていた。だが、止められなかった。

防具を傍に持って、体育館から出ようとしている三年生の一人に勇は声をかけた。七校対抗戦でBチームの主将を務めた人だった。彼は勇を振り返って、さっきはまいったな、と眩し気な眼付きをした。勇は勢い込んでいった。

2「先輩、都大会の出場を辞退してもらえませんか」

「辞退？　なぜだ」

「僕が代わりに出たいんです」
彼の眼が細められ、開かれたときには険悪な色合いが深まっていた。
「おまえ、のぼせているのか」
「僕は試合に出たいんです」
「誰だってそうだ、おれもだ。そのために春休みまで合宿をしたんだからな」
「でも、新学期からの練習には、ほとんど出ていないではないですか」
三年生の肩が不意に盛り上がりを見せた。殴られるのかもしれないと勇は思った。たとえ殴られても、試合に出ることが可能ならばそれでよかった。自分がまだ未熟なのは分かっていた。石渡という一年生にすら完敗した。だが、彼一人に刺激を求めることよりも、広い、もっと熱い燃焼できるぶつかり合いの中に身を投じてみたい気持(きもち)の方が強かった。そうしなくてはならないと思って佇(たたず)んでいた。
「これは鳴島が決めたことだ。主将に文句をつけるのは早すぎる」
「文句じゃないんです。そうしてほしいんです」
「おまえは確かに強くなった。だが、今度の大会はおれにとって最後の公式戦なんだ。おれだって、おまえ以上に出たい」
彼は足早に体育館を出ていった。歩み去っていく姿が横揺れして勇には見えた。あの人は先輩だ、勇は思った。だが、鍛錬することを忘れた人は、単なる先輩で、剣道の先輩ではない。そのとき、勇は三年生になった自分が、どのような道を歩んでいるかとは考えなかった。ちらりと頭をかすめたその思いも、すぐに消えた。竹刀を持ちたがっている、試合に出ようとしている自分しか、そこにはいなかった。
鳴島は金村たち一年生部員数名の中に混じって、洗い場で足を洗っていた。勇は少しきつい眼をして鳴島の名を呼んだ。自分はむきになりすぎているのではないかとも考えたが、鳴島の前に立つと、そんなためらいなど消えていった。
「主将、今度の試合に僕を出して下さい」
笑い顔で振り向いた鳴島は、勇の意外な視線に出会って中途半端(はんぱ)な表情に変(か)った。[3]
「僕は最後の四人に残ったんです。今日は出場選手の審査会だと前にいっていたじゃないですか」
「ああ、そうだ」
「どうして僕がはずされるんですか。あれでは、初めから練習試合などないのと同じです」
鳴島は片方の足を手拭いで拭って、上履きに乗せた。
「そうだよ、あれはあくまでも練習試合だ、だから参考にはならん。小林は始めから員数外だ」
「一年生だからですか」
「そうだ」
「でも、主将と副主将を除いた三年生の人たちは、もう剣道をやめているのと同じです」
「おまえが代わりに出れば勝つというのか」
「できれば勝ちたいと思っています」
鳴島は両方の足を拭き終ると、洗い場を離れて、部室に向かって歩き出した。勇は鳴島から半歩遅れるようにして歩く。
「おまえは、おれに対しても、剣道をやめているのと同じだと本当は言いたいんじゃないのか」
しばらくたって、勇はそうですと返事をした。[4]鳴島は低い声で笑った。朝稽古は、三年生に代わって

布施が主に指揮をとっていたのだ。でも主将はまだまだです、と勇はいった。生意気なことをいったと思った。だが、ためらいはなかった。鳴島は強く鼻息を吐いた。まだまだしか、と呟いた。

「三年生にとっては、今度は恐らく最後の試合になる。弱いかもしれないが、一生懸命、丸二年間の成果を生み落すつもりでやるだろう」

「僕もやります」

「おまえにはまだ先がある。何度でも試合に出る機会がある」

「だから、だから今度も出たいんです」

鳴島は足を止めて勇を見下した。この人の胴を抜くのは、そうむずかしいことではない、と勇は思った。

「連中には最後の試合だといっているのがわからないのか」

「それはわかります。受験勉強があるのも知っています。でも、試合を、剣道を、思い出にされたくないんです」

自分だったら、剣道をやめた時点で、剣道のことは全て忘れてしまうのだろうという予感が、勇にはあった。何かは分からない、不明瞭だ、だが、そのときには、別のものに熱中し、溺れきっているのだろうと信じた。

「思い出……」

「僕は今剣道をやっているんだし、金村だってそうです。打ち込んでいるんです。毎日そればっかしです。満足してます。それ以上に夢中です。でも、遊びとも違うんです。いまはそれしかやっていないんです。是非、試合に出たいんです」

鳴島は白い顔をして勇を見ていた。なまった風が勇の横顔を舐めた。気色悪い、と勇は思った。

「おまえの気持は分かった。だが、今度の試合は、おれたち三年生が出る。精一杯戦う。おまえは、力一杯応援しろ」

鳴島は大股に歩き去った。校庭に取り残された勇は、くやしさでいっぱいになった。遠ざかっていく鳴島の後姿が涙でぼやけてきた。やがて、黒一色に脹れ上がって瞼にたまった。金村が勇の肩を叩いた。勇は剣道衣の袖で眼をこすった。

（高橋　三千綱「九月の空」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）鳴島＝三年生の主将。　布施＝二年生の部員。

鍔迫合い＝互いに相手の竹刀を自分の竹刀の鍔付近で受け止め、押し合うこと。

金村＝一年生の部員。

上ってはいなかった＝技が認められなかったことを意味する。

(ア)　――線1「こんな馬鹿な、と思った。」とあるが、そのときの「勇」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　何人かの三年生には勝てたものの「布施」には勝ちきることができず、都大会への出場権を逃してしまったことに悔しさを感じている。

2　三年生に勝ち、二年生の「布施」にも内容的には勝っていた自分が大会に出場できないことに納得できず、怒りがこみ上げてきている。

3　厳しい稽古を重ね、自信をもって試合に臨んだにもかかわらず、思いどおりの結果が出せなかった自分のふがいなさにがっかりしている。

4　「布施」との試合の中で自分の成長を見せようとさまざまな工夫を凝らしたのに、尊敬する「鳴島」の目に留まらなかったことに落胆している。

(イ)　――線2「先輩、都大会の出場を辞退してもらえませんか」とあるが、ここでの「勇」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　一年生であっても大会に出て活躍したいという生意気なことを先輩に言うことへのためらいがわかるように、とつとつとした調子で読む。

2　勝ち抜き戦で三年生を破ったという自信と先輩に対する優越感に満ちている様子が伝わるように、堂々とゆったりとした口調で読む。

3　勝ち抜き戦で結果を出した自分ではなく剣道をやめているも同然の人間が大会に出るのは納得できないという憤りが伝わるように、激しい調子で読む。

4　試合で一年生に負けても気に留めず、大会に出場することを当然だと考えている先輩を蔑む気持ちがわかるように、少しおどけた調子で読む。

(ウ)　――線3「中途半端な表情に変った。」とあるが、そのときの「鳴島」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「勇」に言葉をかけられ何の気なしに振り向いたところ、思いの外真剣な「勇」の視線に接し、とまどっている。

2　実力もないのに試合に出させてほしいと言う「勇」をからかおうと思ったが、「勇」の鬼気迫った顔を見て慌てている。

3　試合に出られない「勇」を慰めようとしたが、それほど落ちこんでいるようには見えない「勇」に拍子抜けしている。

4　生意気な言葉を発した「勇」をたしなめようとしたが、「勇」のまなざしから強い敵意を感じ、気圧されている。

(エ)　――線4「鳴島は低い声で笑った。」とあるが、そのときの「鳴島」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　三年生は剣道をやめているのと同じだという「勇」の高慢な発言を聞いて、三年生の思いを理解できない「勇」のことを哀れんでいる。

2　剣道をやめているのと同じである三年生ではなく自分が出たほうが勝てると思っているらしい「勇」の思い上がった様子にあきれている。

3　他の三年生と同様に「鳴島」も剣道をやめているのと同じだと答える「勇」の率直さを苦々しく思いながらも、反論する気持ちにはなれずにいる。

4　「鳴島」を含む三年生は剣道をやめているのと同じだと冷静に判断する「勇」の姿に一年生の時の自分の姿を重ね、「勇」に頼もしさを感じている。

(オ)　――線5「試合を、剣道を、思い出にされたくない」とあるが、ここでの「勇」の思いを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　この大会が最後だと言い切る三年生に、剣道に熱中していた一年生の頃の気持ちを取り戻して卒業後も剣道を続けてもらいたいという思い。

2　大会出場が決まった三年生には、受験勉強を理由に稽古をおろそかにするのではなく、最後まで全力を尽くしてから試合に臨んでほしいという思い。

3　三年生にとって最後の大会だからこそ、毎日稽古に打ち込んで今は上級生を上回る実力をつけた自分が出場することで、剣道部に勝利を届けたいという思い。

4　剣道中心の生活から離れ今度の大会を最後の記念にしようとしている三年生ではなく、今、真剣に剣道に取り組んでいる自分こそが試合に出るべきだという思い。

(カ)　この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　剣道と向き合う中で「勇」に表出した熱く真摯な思いを、「勇」の感情や人物間の会話を短文で表現することによって、生き生きと描き出している。

2　三年生が幅をきかせ活気をなくしている剣道部のありさまを、「勇」の視点で出来事や人物の言動を淡々と列挙しながら、写実的に描いている。

3　剣道の実力がつくにつれて「勇」に生じた迷いや葛藤を、「勇」の視点と他の登場人物の視点を組み合わせることによって、多角的に映し出している。

4　剣道一筋で過ごしてきた「勇」が剣道部内の人間関係に注意を払いながら成長していくさまを、情景描写を交えて描いている。

問三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

われわれにとって「買う」ことと「売る」ことはまさに正反対の概念である。一方はお金を支払ってモノを手にいれる行為をあらわし、他方はお金を手にいれるためにモノを他の人に渡す行為をあらわしている。この正反対の意味であるはずの二つの言葉が、ともに同じ「バイ」という音をもっていることの背後にはきっとなにか[1]歴史的な理由があるにちがいない。そう考えながら、答案用紙の山を横におしのけ、手もとにあった角川の『漢和中辞典』を開いてみると、つぎのような説明がわたしの目のなかに飛び込んできた。

「買」という言葉は、あるものと別のものとを取り替える意味である「貿」という言葉を語源としており、はじめボウと発音されていたが後になってバイと発音されるようになったというのである。そして、もともとは売り買い両方の意味に用いられていたこの言葉は、後になって一方の買うの意味にのみ用いられるようになり、他方の売るという意味には「買」という字にモノを差し出すという意味の「出」という文字を組み合わせてつくられた「賣」という文字が使われるようになったという。もちろん、現在の「売」という字はこの賣という字の略字体である。

買という言葉と売という言葉とは、中国ではもともと同じ言葉であったのである。

そこで、つぎに日本語ではどうなっているのかと思って『大言海』(注)を開いてみると、あった、あった、そのなかの「買ふ」の項には「交ふ（かふ）の他動の意のものか」という説明がつけられている。さらに岩波の『古語辞典』で「かひ」という項目を調べてみると、この言葉には「交ひ、替ひ、買ひ」という漢字の表記が当てられており、その基本的な語義として「甲乙の二つの別のものが互いに入れちがう意」という説明があたえられている。

［A］、日本語においても、「買う」という言葉はもともとは売り買いの両方の意味をもっており、あるものと別のものとをたんに交換することをあらわしていたにすぎない。それが売るという言葉と区別されて、お金を支払ってなにかモノを手にいれるという行為をあらわすようになったのは、時代がはるかに降ってからのことのようなのである。

（中略）

「売る」ことと「買う」こと。一方はひとにモノを「与える」ことであり、他方はひとからモノを「受けとる」ことである。われわれにとって、これほどはっきり対立した意味をもつ事柄はない。もしこの二つを混同してしまうと、泥棒か詐欺師として手に縄がかかってしまうはずである。

だが、名探偵(注)バンヴェニストの最初の仕事は、この「与える」と「受けとる」という正反対の行為を表現するインド＝ヨーロッパ語族内の言葉にかんして、[2]ひとつの奇妙な事実が存在していることにわれわれの注意をうながすことから始まるのである。一般にインド＝ヨーロッパ語においては、一方の「与える」という行為は dō- という語根をもつ言葉によって表現されている。［B］英語の donation、フランス語の don、ラテン語の dōnum あるいはサンスクリット語の dānam といった言葉はすべて「贈与」という意味をもっている。だが不幸にして、この一般的と思われてきた規則にはひとつの例外が存在しているのである。それは、同じインド＝ヨーロッパ語族に属するヒッタイト語において dā- という基本的には同一の語根がもう一方の「受けとる」という行為を意味しているということである。

同じ起源をもつ言葉が二つのまったく正反対の意味をもっているというこの矛盾(II)。だが、われらがバンヴェニストは、ながらく言語学者を悩ませてきたこの矛盾にたちまちつぎのように鮮やかな解決をあたえてくれるのである。すなわち、この一見した矛盾こそひとつの歴史的な事実にほかならない、とかれは推理する。遠い記憶のかなたの古代の共同体において、「与える」ことは同時に「受けとる」ことをも意味していたのだ、というのである。

バンヴェニストがあたえてくれたこの解決は、じつはマルセル・モース(注)が『贈与論』のなかで発見した「古代的な交換形態」というものの言語学の立場からの再発見にほかならない。よく知られているように、モースは、たとえばマオリ族において、贈られたモノのなかには返礼を怠る受けとり手を殺してしまう魔術的な力が吹き込まれていると信じられていることを指摘する。ひとにモノを贈ることは、それゆえ、受けとる側にかならず返礼の義務を負わせることになり、一方からの贈与と他方からの返礼とのあいだのはてしない繰り返しがひきおこされることになるというのである。モースは、古代的な共同体とは、このような互酬的交換によってかたちづくられる社会関係の総体として理解しうると主張したのである。与えることが受けとることでもあり、受けとることが与えることでもあったこの[3]古代的な交換形態の痕跡を、バンヴェニストはインド＝ヨーロッパ語の dō- という語根をもつ言葉の両義性のなかに見いだしたというわけである。

もっとも、モースの『贈与論』を読んでさえいれば、ワトソン博士(注)ですらこの程度の推理は可能であったかもしれない。だがこれで一件落着というわけにはいかない。[4] いや、バンヴェニストによる本格的な推理はまさにここから始まるのである。なぜならば、古代的な交換形態において与えることと受けとることが同義であったならば、いったいどこから「与える」ことと「受けとる」ことが正反対の意味をもつような経済行為が生まれてくるのだろうか？　贈与と返礼のあいだの閉じられた円環のなかから、いったいどのようにして「売り」と「買い」とを区別する「商業」なるものが生まれてくるのだろうか？

じっさい、バンヴェニストは、いくらしらみ潰しにインド＝ヨーロッパ語族に属する言葉を調べてみても、「商業」にあたる経済行為を示す共通の語根を見つけ出すことができないという。もちろん、これは古代において商業が存在しなかったということを意味するのではない。商業とは人類の歴史とともに古く、個々の民族はそれぞれ商業を意味する個別の言葉をもっている。だが、それにもかかわらず、これらの言葉からなんら共通する語根を見いだすことができないのである。

いや、それだけではない。たとえばラテン語において商業を意味するnegōtiumという言葉を見てみよう。それはたんに暇（ōtium）のない（neg-）ことを意味しているにすぎないことがわかるだろう。また、英語におけるbusiness、フランス語におけるaffaireという言葉を思いだしてみよう。それらも本来はたんに忙しい（busy）こと、あるいはやるべき（à faire）ことという意味であったにすぎない。商業を指し示すこれらの言葉がそれ自身なにも明確な意味をもっていないということは、商業というものが共同体のなかにおいて本来じぶん自身を指し示す固有の名前をもっていなかったということを物語る。

事実として存在した商業が名前として存在しないというこの矛盾。しかしながら、名探偵バンヴェニストは、まさにこの第二の矛盾のなかに[5]「商業」にかんする真実を見いだすことになるのである。

すなわち、それは、「商業」とは古代的な共同体におけるあの互酬的な交換とはまったく別の出自をもっているという事実である。いくら共同体の内部の歴史を遡ってみても、商業なるものの起源を見いだすことはできない。商業とは、外国人や自由民といった共同体の外部の人間によって専業的に従事され、共同体と共同体のあいだを仲介することによって成立した活動なのだということである。だからこそ、それは共同体の内部の人間にとって「暇ではないこと」、「忙しいこと」あるいは「やるべきこと」という消極的な言葉でしか指し示しえない事柄であったのである。

マルクス(注)の言うように、「商品交換とは、共同体の果てるところで、共同体がほかの共同体またはその成員と接触する点ではじまった」のである。そして、このようにして成立した商業というものが共同体の外部から内部に侵入してあの「古代的な交換形態」を解体しはじめたとき、はじめて贈与と返礼とのあいだの閉じた円環が「売り」と「買い」という二つの正反対の行為に分離されることになったというわけである。

（岩井　克人（かつひと）「二十一世紀の資本主義論」から。）

（注）『大言海』＝国語辞典。

名探偵バンヴェニスト＝言語学者エミール＝バンヴェニスト。ここでは筆者の提起する問題を解決に導く人物として「名探偵」と呼んでいる。

マルセル・モース＝フランスの社会学者・人類学者。

ワトソン博士＝コナン・ドイルの作品中に登場する、探偵（シャーロック・ホームズ）の助手。

マルクス＝ドイツの経済学者。「資本論」を著した。

(ア) 本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　A　しかし　　B　もちろん　　2　A　だから　　B　あるいは
3　A　すなわち　　B　たとえば　　4　A　ところで　　B　さらに

(イ) 本文中の〰〰線Ⅰの「の」と同じはたらきをする「の」を含む文を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　彼女は心の豊かな人だ。　　2　駅の北側に大きなビルが建つ。
3　体調が悪いので、学校を休んだ。　　4　今回は、参加するのをやめた。

(ウ) 本文中の〰〰線Ⅱの熟語と似た意味をもつ四字熟語として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　一意専心　　2　一挙両得　　3　二束三文　　4　二律背反

(エ) ――線1「歴史的な理由」とあるが、正反対の意味の「買」と「売」が同じ音をもつ理由を調べた筆者は、どのような結論に至ったか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「売」は、売り買い両方の意味で用いられ「バイ」と発音されていた「買」をもとにしてできた字であり、「買」と「売」はもともと同じ言葉だった。
2　中国語では「買」も「売」も「バイ」と発音されるまったく同じ字だったが、日本に渡ってから別々の漢字になった。
3　中国語で売り買いを意味していたのは「ボウ」と発音する「貿」だったが、その後「買」「売」に変わり、「バイ」という読みがあてられた。
4　日本語の「買う」と「売る」は、中国からそれぞれの字が伝わるまでは「交換する」という同じ意味をもつ言葉だった。

(オ) ――線2「ひとつの奇妙な事実」とあるが、どのような事実か。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　インド＝ヨーロッパ語族に属する言語では「与える」行為を表す言葉は一般に「dō-」という語根をもつが、ヒッタイト語においてはその語根が見られないこと。
2　インド＝ヨーロッパ語族に属する言語には、そのほかの言語には見られない「dō-」という語根が、「与える」行為を表す言葉にあること。
3　インド＝ヨーロッパ語族に属する言語において、「与える」行為を表す言葉がもつ語根と同一の語根が、正反対の「受けとる」という行為を表す言葉に見られる例があること。
4　インド＝ヨーロッパ語族に属するあらゆる言語において、「受けとる」行為を表す言葉と「与える」行為を表す言葉のどちらも同じ語根をもっていること。

(カ) ――線3「古代的な交換形態」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　贈与されたモノを受けとるのは義務であり、受けとる側の意思にかかわらず贈与は繰り返される。
2　贈与を受けた側が返礼を怠ると死を伴う罰を与えられるという、厳しい規律に縛られている。
3　贈与品とその返礼品には魔術的な力が吹き込まれるため、人々は警戒しながら交換を行う。
4　贈与される側には返礼の義務が発生し、贈与と返礼が果てしなく繰り返される。

(キ) ――線4「これで一件落着というわけにはいかない。」とあるが、どのような問題が残されているのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「与える」ことと「受けとる」ことが正反対の意味をもつ「商業」という行為を、どのようにして共同体の人々に納得させることができたのかという問題。

2 「与える」ことと「受けとる」ことが正反対の意味をもつ「商業」という行為が、どこから、どのようにして生まれてきたのかという問題。

3 「与える」と「受けとる」という正反対の意味をもつ言葉が、いつから「売り」と「買い」という言葉に形を変えたのかという問題。

4 「与える」ことと「受けとる」ことが同義であった古代の共同体で、どのようにして「売り」と「買い」の行為を区別することができたのかという問題。

(ク) ――線5「『商業』にかんする真実」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「商業」は、日常的に互酬的な交換が行われていた古代の共同体の人間にとって重要ではなく、「暇ではない」「忙しい」という理由をつけて敬遠されていた。

2 「商業」は、共同体の内部ではなく、ほかの共同体またはその成員との接触によってはじまり、共同体と共同体を仲介する活動であった。

3 「商業」は、外国人や自由民といった、共同体の外部の人間によって専業的に従事され、そうした人間のあいだでしか行われない特権的な活動であった。

4 「商業」は、共同体の果てる場所でほかの共同体との間で行われる活動で、互酬的な交換で成り立っている共同体の内部には侵入が許されなかった。

(ケ) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「売る」と「買う」という言葉を考察しながら、古代の交換形態と「商業」の発生について論じている。

2 「売」「買」という同じ音をもつ言葉の広がりと「商業」の広がりの相関関係を古今のさまざまな事例を分析することによって論じている。

3 「商業」がいかにして共同体に浸透し、発展していったかを、著名な言語学者の提唱する説と筆者の推測を対比させながら論じている。

4 「商業」が古代の共同体でどのような形態をとっていたかを、贈与と返礼という形態と比較しながら現代の「商業」のあり方への批判を含めて論じている。

問四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

松村完平が物語に、大坂(注)に声いと善しくて、今様の長謡といふ物を謡ひて業とする男ありき。ある日ものへ行く途にて(ある所へ行く途中で)、山伏体(注)なる男あへり。行き違ひながら、そなたの声のめでたきをしばし我に貸してよと云ふを、道行きぶりの戯言(行きずりの)と思ひて、笑ひつつ唯といひて行き過ぎけるが(いいですよと返事をして)、三日ばかりありていた(病気)はることもなきに(にかかったのでもないのに)、ひしと声かれて出ず。

されどかの異人に声を貸したることにつゆ心づかず(少しも気づかず)、住吉神社は産土の神(注)なれば、祈らむと思ひて出で行きける途にて、またかの山伏体なる人来たりあへり。先つころ我が請へるごとく声を貸しながら、そを忘れて、産土の神に申し祈らむとするこそ心得られね、汝かしこに祈らば、きはめて(きっと)我を罪し給はむ、然もあらば、我また汝にからき目を見せむものぞ(つらい思いをさせるのだぞ)、然らむよりは、しばしの間なればまげて(ぜひとも)貸してよと云ふに、始めて先に声を借らむと云ひし時に、唯しつることを(承諾したことを)思ひ出して、卒に恐ろしくなりて、きはめて産土の神に祈るまじと、堅くちぎりて途より立ち帰りけり。

さて三十日ばかりありて、物へゆく途にてまたかの異人行き逢ひけるに、その方の声は今返すべし、受け取りてよと云ふに、はや声もとのごとくになりぬ。

かくて異人この報いをなすべしとて、呪禁(注)のわざを授けたるが、よろづの病に験ありて、後には謡うたひの業を止めて、この呪禁のみして世をやすくおくりしと云ふ。

（平田　篤胤「勝五郎再生記聞」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）大坂＝大阪。
山伏＝山に暮らす修験者。
産土の神＝生まれた土地の守り神。
呪禁のわざ＝災いをはらい清めるまじないの技。

(ア) ――線1「唯といひて行き過ぎける」とあるが、そのときの「今様の長謡といふ物を謡ひて業とする男」の心情を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「山伏体なる男」に褒められていい気分になり、できそうもないことを安請け合いしている。
2 「山伏体なる男」が冗談を言っていると思い、たいして気にもかけずに適当な返事をしている。
3 「山伏体なる男」の風貌が異様だったので、関わりを避けるために簡単な返事をしている。
4 「山伏体なる男」の願いが真剣なものであると感じて、いやいやながら承諾している。

(イ) ――線2「我また汝にからき目を見せむものぞ」とあるが、「山伏体なる男」が「男」(=「今様の長謡といふ物を謡ひて業とする男」)に対してこう言った理由を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「男」が声を貸すことを承諾したことを忘れて、産土の神に声を戻してもらおうとしていることを知り、このままでは自分が罰を受けることになると思ったから。
2 「男」が声を取り戻すために産土の神だけでなく他の神にも祈れば、自分がより多くの罰を受けることになると勘違いしたから。
3 「男」に声を借りるために会おうとしただけなのに、「男」が約束を破って産土の神に祈ろうとしたことが許せなかったから。
4 「男」が産土の神に祈ったために自分が借りることができなかった「男」の声を、今度こそ自分のものにしたいと思ったから。

(ウ) ――線3「異人この報いをなすべし」とあるが、「この報い」とその結果を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

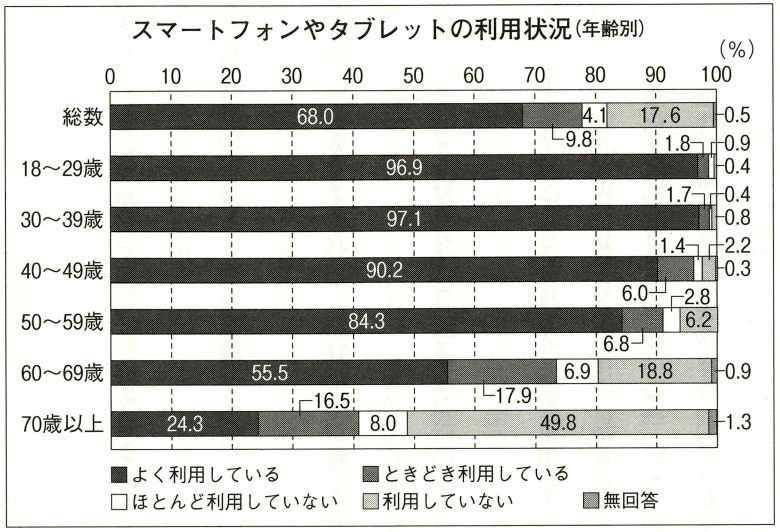
1 「山伏体なる男」が、「男」から声を奪ったことへの償いとして「男」にまじないをかけたので、「男」は声が出るようになっただけでなくあらゆる病気が治った。
2 「山伏体なる男」は、「男」が産土の神に祈ったことへの報復として「男」が病気になるようにまじないをかけたが、その効果はなく、「男」はやすらかな日々を送った。
3 「山伏体なる男」は、声を借りたお礼として「男」にあらゆる病気に効くまじないの技を授け、「男」はそのまじないを活用して一生安泰に暮らした。
4 「山伏体なる男」が、「男」の声が戻ったことを祝福して「男」にまじないを教えたので、「男」は一生病気になることなく幸せに暮らした。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

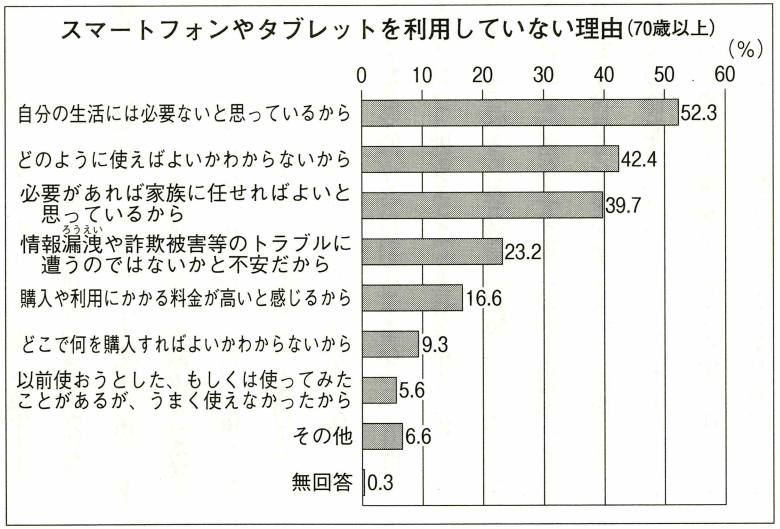
1 「男」は「山伏体なる男」に声を貸すと約束したが、三日後に声をからしてしまったため、貸すことができなくなった。
2 「男」は「山伏体なる男」に声を貸してしまったことをひどく後悔して、声を取り戻すために産土の神に祈願した。
3 「男」は「山伏体なる男」におどされたことで恐ろしくなり、自分の身が守られるようにと産土の神に祈り続けた。
4 「男」が「山伏体なる男」に三度目に行き会ったとき、「山伏体なる男」から声を返すと告げられ、「男」の声は元通りになった。

問五　中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」にデジタル・ディバイドの問題について調べ、話し合いをしている。次の**グラフ1**、**グラフ2**、**資料**と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

グラフ1



グラフ2



資料

「誰一人取り残さない」デジタル化の実現に向けて、デジタル・リテラシーの向上が必要である。我が国では、「端末の操作が難しい」、「近くに相談できる人がいない」といった理由で、デジタル活用を躊躇（ちゅうちょ）する人たちが高齢者を中心に存在している。

これまでも地方公共団体や地域のパソコン教室等において、これらデジタル初心者をサポートする取組（とりくみ）は行われてきたが、社会全体にデジタルの定着を図る観点では、より身近な場所で身近な人からスマートフォン等のデジタル機器の利用方法を学ぶことのできる「デジタル活用支援員」のような取組をさらに拡充させる必要がある。

グラフ1・2，資料　総務省「令和3年度版情報通信白書」より作成。

Aさん　私たちは、社会におけるデジタル化の必要性をふまえて、デジタル・ディバイドの問題について発表することになりました。デジタル・ディバイドとは「インターネットやパソコン等の情報通信技術を利用できる者と利用できない者との間に生じる格差」のことをいいます。今日は、日本におけるデジタル・ディバイドの傾向と、その解決策について考えてみましょう。

Bさん　**グラフ1**を見てください。これは「スマートフォンやタブレットの利用状況」を年代別に示したものですが、「よく利用している」と「ときどき利用している」を合わせた「利用している」人の割合が、七十歳以上では大幅に低いことがわかります。

Cさん　高齢者とその他の年代の人々との間に存在するデジタル・ディバイドの問題が深刻ですね。

Aさん　デジタル庁も設置されましたし、新型コロナワクチンの接種予約やマイナンバーカードの推進などを見ても、国や自治体ではデジタル化を加速させていることがわかります。このような中、超高齢社会の日本では情報格差の解消が急務といえますね。デジタル技術の使用が高齢者になか

なか浸透しないのはなぜなのでしょうか。

Dさん　**資料**を見てください。これは総務省の白書の抜粋ですが、これを見ると、高齢者がデジタル機器を遠ざけてしまう一因として、［　　］があるとわかります。

Bさん　そうですね。より身近な場所で身近な人からデジタル機器の使い方についてサポートを受けられるように、支援員を地域に増やすことが必要かもしれません。

Cさん　**グラフ2**も見てください。これは七十歳以上の高齢者が「スマートフォンやタブレットを利用していない理由」を調査した結果ですが、「自分の生活には必要ないと思っているから」と答えた人が五割もおり、端末を「どのように使えばよいかわからないから」という人を上回る結果となっています。

Dさん　なるほど。自分にはデジタル機器は必要ないと思っている人が多数いるということですね。デジタル機器の利用によって受けられる公的機関や医療機関のサービス、インターネットでの買い物など、デジタル機器の利便性を伝えることが必要だと考えられます。

Aさん　そうですね。高齢者にもデジタル化の恩恵を受けていただきたいですね。これまでの話をまとめると、デジタル・ディバイドを解消するために、まず取り組むべきことは、……だと考えられます。次回は、私たちができることについて、より具体的に話し合いましょう。

(ア)　本文中の［　　］に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　デジタル機器の利用をためらう高齢者に対して、利用を勧める活動が不十分であること
2　デジタル機器が従来よりも複雑化していることで、高齢者には操作が難しくなっていること
3　デジタル機器が多様化し、それぞれの機器の操作方法を学ぶ場も少ないこと
4　デジタル機器の操作を難しいと感じていることに加えて、相談できる人が身近にいないこと

(イ)　本文中の……に適する「Aさん」のことばを、次の①～④の条件を満たして書きなさい。

①　書き出しの［まず取り組むべきことは、］という語句に続けて書き、文末の［だと考えられます。］という語句につながる**一文**となるように書くこと。
②　書き出しと文末の語句の間の文字数が**三十字以上四十字以内**となるように書くこと。
③　**グラフ2**と**資料**からそれぞれ読み取った内容に触れていること。
④　「高齢者」「デジタル活用支援員」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

（問題は、これで終わりです。）